

2014. 05. 21

ボランティア活動の途中で考えたこと

おとうさんたちのネットワーク被災地支援活動報告No. 28

NPO法人劇団仙台小劇場
おとうさんたちのネットワーク世話人
石垣政裕

例年になく雪の多かった東北にも桜の季節が訪れ、4月の10日を過ぎれば、遅咲きの山桜をのぞけば、ほぼ咲きそろったむっちりとした華やかな枝ぶりを誇っていました。全日本リアリズム演劇会議中部ブロックから深夜バスなどで集まったボランティアと一緒に、前日、福島に隣接する宮城県の上原町で、万葉集の時代にはすでに使われていたという織り物の原料となる「からむし」の植え替えの作業を行ってきました。



畑仕事を終え、陽が傾く前に記念写真。ほこりまみれにした風が凜々。



夜、原発事故からの子どもたちのこころの変化と、園児を守るための保育の現状とを南相馬市にある聖愛保育園園長 遠藤美保子先生から聞く。「子どもたちをまもる」ということが国の仕事でなければ、私たちは何のためにこの国で暮らしているのだとわが胸をかきむしる。

女性が多い一団とはいっても、「つねひごろ、大道具をたたいているので力仕事は苦痛ではありません。」と3日かかる仕事を1日で仕上げた、地元の受け入れ先ボランティア団体の方を驚かせてきました。演劇に携わる女性の「パワー！」にあらためて惚れてしまっただけでなく、このようなつながりを持っていることを誇りにも思いました。

かつて住宅が並んでいたという海岸伝いの荒涼とした土地を、力尽くで守ろうとする護岸の建設だけが

進んでおり、福島の実況ツアーで感じたことと合わせて、3年経ってはじめて人間の文明の傲慢さを痛感することになりました。その意味では、「からむし」の植え替えという手仕事への回帰が、たとえ企業化まで長い道のりであっても、私たちにとっても意味のある労働ではないかと考えます。原料となる小木を植え、糸を紡ぎ機にかける。半年もかけてできあがるのは一畳分もあるでしょうか。どこか演劇の『ろうどう』に似てなくもありません。

さて、翌日、国道6号線で南相馬市から南の浪江町に向かうと、持ってきた放射線量計が少しですが高くなります。海岸線に近い車の左側の窓からはまだ、残った瓦礫が所々に積み上げられており、大きな瓦礫が3年も過ぎた今になってやっと片付けられたような痕跡に驚きます。

原発事故の前、毎年冬になると、私は南相馬市の小高区から奥の吉澤牧場まで牧場の隅を借りて作られていた畑の「大根掘りに」来ていました。時には妻の働く幼稚園の園児たちと、ときには世界各国からの留学生を連れてこの道を通っていました。今は放置されたままになっている、原発から5キロメートルの養鶏場の鶏糞を利用して作られていた畑のダイコンは、生で子どももかじることができるほどでも甘かったのを覚えています。

6号線を右に入り比較的細い道を山側に向かって走ります。持ってきた線量計の数値が急に上昇しました。道の辻々に置かれている放射線の観測装置がオリンピックを誘致するために世界に向けて語られた嘘に反対してかかげられたプラカードのように見えます。

私たちが中部ブロックの人たちと訪れた「希望の牧場・ふくしま」は小高区と浪江町にまたがった広い敷地です。線量計さえ見なければ、牛がゆったりと草を食む平和な穏やかな日々と信じ込むこともできます。「みすてられたんですよ、私たちは。この牛たちはただ『生きています』だけです。」と、殺処



吉沢さんが語りかける言葉ほどに、私たちの舞台は、現状を表現しきれ
るのだろうか

分からまぬがれただけの牛たちに目をやり、言葉激しく語りかける代表の吉沢正巳さんの言葉は、私の胸を容赦なくかきむしります、『この牛は牛ではない。何も知らずに、何も語らずに、のんびりと与えられる干草を待つ演劇人としての私なのだ』と。

私たちは、牧場の丘の上から事故を起こした原発のある海の方を眺め、風向きを気にするように山側へと視線を移します。この山の向こうは、東北の各地につながっていると、当たり前のことを忘れてでもいたかのように思い返す恥ずかしさ。3年経って、原発の再稼働の準備が粛々に行われる中、いつの間にかこころの中にできていた県境を、今になって消しゴムでごしごしとこする後ろめたさ。木の芽や新緑の、生きる物の命を彷彿とさせる、みせしめの春は残酷だと、この地で初めて思いました。

次のような有名な万葉集の恋歌があると車のラジオで聞きました。

君が行く、道の長手を、繰り畳ね、
焼き滅ぼさむ、天(あめ)の火もがも
「あなたが(罪を負って)ゆく、遠い
道をたぐり寄せて焼き滅ぼしてしま
いたい、そんな天の火があれば」と



牧場の牛は覚えた道だけを通る

いう、別れなければならぬ愛する人を思う万葉の女性の直截な、激しい歌です。だれ一人、罪を犯したはずのない人びとであるはずなのに、長年暮らした地域を捨て、親しい人と離れなければならなかった福島この現状を、この万葉の歌のように荒々しくも直裁に語る舞台の言葉を聞きたいとも思うのです。

テレビや本屋で売られる福島の情報でなく、あなた自身の目で福島を理解し、あなた自身の耳で福島から聞き、あなた自身で福島とつながり続けることができるようなフェスティバルに、きっとなると思います。どうぞ東北の私たちに力をお貸し下さい。